

商想

法燈 いまだ消えず

「龍の観音」清水庵の復興建築について

佐伯史談会々員 富沢 泰
畑の浦史談会々長

「清水庵」にもまわった。参道の落椿、天空より落つる龍のしぶき、そしてかなり老朽の姿の庵の本堂庫裡、境内近く乱雑に散乱する古塔、畑の浦の御土史、御土文化に対する追求の場はここであると思つた。

これは羽柴幹事の「早春の遠遊」(四十七年三月佐伯史談)の一節で、畑の浦探訪に際しての感想である。この庵は今無住である。所内竹の浦河内に晋山した、近藤謙太郎(本会会員)が去つたままである。

本堂・庫裡共にすでに雨潦りがひどく、畳はぬれ、古倒壊寸前である。御本尊、聖観音の厨子も、脇侍の仏達の姿も今日一切ない。まるで廢寺である。それは仏達既に高泉寺に遷されているからである。

遠い古、それはいつの頃からか、畑の浦部落は無論のこと、入津湾を囲む五つの浦々の人達は日常、色利峠を越して米水津の人達と、月の十七日の観音の日には、老若うち連れよく参詣していたが、その伝統の観音信仰は、新しい時代の流れの中に、埋没し消え去ろうとするのか、あるいは、

否、そうではない。今本堂、庫裡共に改築の計画が進みつつある。

具道佐伯一延因縁、水立から畑の浦味を越しておりつ

いたところの橋がある。その橋を渡らず、具道から左に別れて舗装された道は折外辰浦に通じている。ここは釣り場である。左上へのぼればその細い道が観音道である。稚木と寒竹の生い茂る中に、蒼蒼した落椿の参道、左手上の崖下に多くの五輪塔を仰ぐと、すぐそこは庵寺、この道は僅か百五十米余りである。

庵の左右にまいた、草庵と云うにすぎないかもしれぬが、通称「龍の観音」といわれるごとく、両おがりは速くまで龍のしぶきが散る。正しくは音羽山清水寺とよび、以前は独立寺院であつたが、現在日妙心寺派福水寺(住職龍淵恭道師)の境外仏堂となつてゐる。

本堂・庫裡の背後日ネマリ立つ断崖、そこは具道海岸特有の亜熱帯樹「アコウ」が、岩はだの裂け目に群生している。山の稜線はぶつ切り切れた中広い断崖だが、その中程に山上の溪流が懸つて龍となつてゐる。

本堂前の庭に立つて下を望めば、すぐ真下に福網代の家々が点在している。呼べば答えられる程のま近きだが、ここは仙境であり、聖地であるという環境はくすくすしていない。

いよいよも名づけた「音羽の龍」「清水庵」。まるで清水寺の分霊をここに祀つたかの如き名称である。

当地の社家松木宮司の所蔵する「鶴天神縁起巻」の記載によると、「藤原期、延喜年間(一〇二〇年〜一〇三三)旅の若僧が、この地を聖地として、観音大士の法燈をかかぐ」と。その依つて来た大延は、今にしては判らぬいが、諸国行脚の旅の行者は、龍の水にうたれて修行を重ね、草庵を結んだといふのである。

福網代という地名は、往古漁業の網代であつたと伝え

られるが、才左畑の浦に多い姓、戸高一門祭祥の地となつて、今日でもその一族がこの部落に定着し續けている。この一門の姓たちが、口伝に教つてゐる子守唄がある。

とどか じようかん 子じようかん

親子代々 子代々

親 仁七郎 子 仁七郎

旧姓戸高、今門田生太氏は追憶の唄を口ずさむ。この人の旧姓戸高に曰、代々仁七郎を襲名し、遠祖は市之達重忠、また曰仁七郎重忠とも聞かされてゐるといふ。

戸高一門は、土佐の国主長曾我部家（元親）に属し、關が原合戦に徳川勢に敗れ、領地を逐われ家長は四散したが、この一門は挙つて豊後水道を渡り、ここ福網代に定着し今日に及んでゐるが、同姓を乗るもの數十戸以上に及び、三百餘十年の間に、結婚により他姓のものとの血の交流は、殆んど部落の大半に及んでゐるようである。戸高康守氏が所載する貴重な古文書が発見された。この文書は寛保四年（一七四四年）一三二八年前のものであるが、その一節に、

「慶長年中大坂落之初、土州長曾我部家臣戸高貞親男 静助、元和元年下着」云々

とある。子守唄の中の「じようかん」は、文中の貞親を唄つたものと思われるが、恐らく入道名であり、既に仏教に帰依し、観音信仰が厚く「薩の観音」に一門こそつて帰依し護持したものに違ひない。

佐伯地方には長曾我部ゆかりの地区が点在してゐる。

佐伯市の大日寺の開祖香乘律師（佐藤鶴谷先生佐伯系）あり、鶴見所羽出浦に高橋一門あり——本誌会員安部弥右衛門老の御案内で、昨夏同世を訪れ藁藁、尚振寄にも遺跡が

あると承つた。また上浦所の何処かの部落にもあることさほのかに聞いてゐるが、まだ探訪を済ませてゐない。今、佐伯市から対岸の土佐、宿毛港に乘船してみて、部落の漁船で宿毛地方への真珠稚貝購入のコースからして、船路の容易なことが首肯される。

観音の境内近く、五輪の塔が敷か所に散在してゐるがその中に「山王様」と称し、多数の古塔が落葉に埋もれてゐる場所がある。七十歳をすてに越した戸高板吉老に、少年の頃の話をきくと、福網代部落には、正・五・水月氏の神の天神様におこもりを行つた後、戸高一門だけこの山王塚に集り、お酒などを供えて祖靈の供養を行つてゐたことである。その場所を昨年三月末、史談会を中心として復元作業を行つたが、古塔・古墓等二十七基が復元され、他に欠除したものもあつた。（本誌四二年三月号既載）

昨年、観音像・脇侍と福泉寺に遷した祭判明したことが、本尊「立聖観音」は秘仏とされてゐるが、脇侍仏不動尊、毘沙門天は一米三、寄木彫刻であるが、記録によると、安永五年（一七七六年）当時出身の禅僧、丹波国綾部隆興寺住、牧水和尚の発願によつて修復がなされてゐる。

牧水和尚は福泉寺の徒弟であり、富高氏の出で、その生家は現在も、その裔は富高丈夫氏（本会役員、高江所教育委員会理事）である。昨年正月、私は牧水和尚の隆興寺を訪れたが、綾部市に奈良時代藤原朝期、朝鮮よりの帯化人の手によつて、鍍錦の織物の里であつたが、現在も織物業の地はかわらない。隆興寺は室町上期よりの古刹で、徳川期綾部城主鬼氏の菩提寺で、北鬼氏は戦国時代伊勢・志摩の水軍の將で、徳川秀忠將軍に依つて綾部

城主に封ぜられ、牧水和尚は隆興寺中興の祖として仰がれ、同寺に塔がまつられてあった。

牧水和尚は、本寺福泉寺に大鈿鐘其他仏像の修理等、多くの足跡を残している極めて「御土愛」の豊か女人で、富高古文書(富高平治氏蔵)の手紙によつても、その人間性は追慕に値する人で「龍の観音」の信仰の程がうかがわれる。

この和尚の修復後二百年を経てはるが、更に遡ると、室町中期頃は清水庵に安置されていたものとうかがわれる。

信仰にも起伏がある。そしてそれは堂宇・伽藍にも反映する。戦後の庶民信仰にも、国家的民族精神の剪揺はまぬがれない。長い伝説の「龍の観音」信仰もその難はあつた。その表現は、冒頭の羽柴翰事の短文の中に完全に表現されている。しかし一時的な混乱は、悠遠の歴史を、まましては庶民の観音信仰の根は広く厚く変わらぬ。私は今ハシノイと思つば、葉根舞の一節である。

「雁、寒潭ヲ渡ル、雁去ツテ潭影ヲ残サズ。」

風、疎竹ニ来タル、風去ツテ竹声ヲ止メズ。」

今都落の中には観音講の婦人の集い百数十人、改築委員会田中光季委員長を中心に、四十数名が組織化され、その行動は緒についている。

信仰の力は強い。燃えれば炬となる。戸高一門の分流戸高藤平氏の美譽を、此の誌上に書くの是非を起して紹介することを許していただきたい。

同氏の父善之助氏は今春不帰の客となつたが、今回その供養のため百万圓の寄進が行なわれた。更に祖父勝之丞氏(十数年前物故)追善のため、本堂・庫裡の建築用杉材(松を用いてする柱材等を除く)一切を、日向路より既に作業場に搬入され、製品化されている。

松枝もまた多量に、楠本浦の愛林家で福泉寺に關係のない小野家(当主太氏)から寄進された。

しかし、神社も佛堂は、建築坪数及少なくて工費は案外かさむものである。最近の神社建築でその体験を得たが、木材は調かつたものの、募財は仲々のことではないことは充分承知であるが、これも信仰と後代へ遺す文化財であることを思えば、この厚い壁は突き破つて行かぬはならない、入津湾の浦々は無論、外に向つても募財行を拓けて行かぬばならぬ。それはそのまま、無縁の衆生を首縁に結ぶ仏の心だと思つて。

開祭は進む。自然と歴史と、開祭という近代文明のブルドーザーは、人間の魂のふる里を、そのおどろきの下につぶして行く。

「龍の観音」は、われわれの心の故郷、これを広く佐伯という名のつく皆の人々にも味あつていただきたい。

工事が終わった晩、陶芸家兼測師の手作りの茶碗で「音羽の龍」の法の水で茶を点じ、史談会の各位と、御土の歴史と風月を語りたい希いは、ひとり同師だけの夢でなく、畑の浦史談会の皆の希いでもある。

「龍の観音」、法燈は消えずと念じて。合掌。

畑の浦史談会一最近の行事、活動

- 七月 日経塚庚申塔復元作業、会員十名出席
- 七月二三日(三)日 北九州大宮民俗研究会、男女学生及O.B. 三〇名ほど畑の浦公民館に迎え、会員多数参加その調査に協力。
- 八月 日経江新教育委員会の文化財教室に多数出席

八月 予定
 九月廿三日 夜 福泉寺にて「茶」について「夜話」龍測師 指導
 九月三十日 伊勢本神社神社に「はまのう」松枝の作業